

特 54

21

中嶋夜筋

揚州周延筆

心齋橋之助

心齋橋之助

心齋橋之助



芝居新編



第...番目大巻
序部
足利持氏館の
観音堂被劫の

士小栗外傳

淨瑠璃

五笑

樂春戲
常磐津連中

貳幕目

鶴ヶ岡一の鳥居の場
相模川駕光閣殺の場

三幕目

筑波山風間山塞の場
同八郎雪中捕物の場

四幕目

小栗浦重館の場
同助重居間の場

同館外堀の口の場

五幕目

相州権現堂村の場

横山安秀隠家の場
同返し

相州六浦濱邊の場

六幕目

漁夫小助住家の場
同返し

同返し

七幕目

南裏手照天危難の場
青嶺遊女屋の場

八幕目

箱根山風間捕物の場
同地獄谷助重危難の場

大詰

熊野那智山の場

役人替名

小栗判官代小次郎 我 當

名武の侍女青柳二やく

万長の女房小笹 大三郎

一色式部少輔詮秀

風間九郎正貞 四やく

田鍋平太郎長 又 吉

常阿上人

娘由縁實は 三ツ之助

片岡加次郎 路 鳥

万長娘花の 仁三郎

一色左京之亮直兼二やく

田鍋平八郎長為 三やく

足利左馬頭持氏 鬼 丸

娘小藤實は 三やく

片岡加太郎 市 藏

腰元かほよ 市 藏

上杉安房守憲實 四やく

横山大膳安秀 市 藏

結城六郎持朝

美登小太郎為久 三やく

人買常陸 幸 藏

實は小太郎為久

横山太郎安國 四やく

田鍋平六郎長秀 瑞久三郎

人買三田小鷹

横山次郎安延

名武常陸之助

萬光 四やく

下僕道助 冠十郎

後藤兵助を高

青嶺の万長

名武篤光息女 二やく

照天姫 團之助

水仕女小萩

實は照天姫

小栗孫三郎満重

後藤小助高光 四やく

風間八郎正國

源夫小助

實は後藤小助

但し役割之儀ハ表面と

御引合御覽被下候以上

○第一番目序まゝ本舞臺都而足利持氏館の体真中よ持氏
上の方よ一式詮秀天狗五郎下の方よ上杉安房の守磯崎六
郎素袍の拵らへよて住ひ持氏仕打あつて(持)佐々目が谷
の光り物を見届の爲結城持朝を遣はせしがいまだ歸り來
らずや變化誠なるや憲實いか、思ふぞ(上)此鏡倉よ妖怪
あぞ住可いハれ更よムリ升ぬ(詮)變化無とも申され升ぬ
ト此時結城出て來り(結)アリヤ持朝變化の實否見届立歸
つてムリ升る(持)ホ、ヲ待うけし結城六郎變化の實否ハ
いか、なりぞ(結)ハ、昨夜佐々目が谷へ参り妖怪今や
と思ふ折柄一人の老僧あらハれ此七觀音堂の延文四年よ
亡びし新田義興あらびよ十人の忠臣の靈とわがめし堂と
の事妖陰ハ虚談よ申事(詮)誠翁よ出逢しならばろれも狐
狸のたぐいなるんさやうを堂ハ無益あり君よ彼の觀音
堂をこぼたせ給へ(持)其方の詞なるぞト此時兩花道ホ
て小栗満重名武篤光(滿篤)アイヤまばらくト兩人出て來
り(滿)彼の觀音堂の義ハ渡船上人義興以下十人を怨靈を

封し御堂(篤)打こぼたん事れと、まり下さり升よ(持)其
方共が諫め尤あれと此一戰ハ予ケ武勇ヲ掛わる今より直
よ破却せよ五郎打こぼつ奉行ハ誰れよ仕らんや(持)滿重
篤光へ申付ひ(滿篤)此義ハ余人の者へ(持)主命背く(滿
篤)是非よ及ばぬ何れも御めんト兩人いつさんよ向ふへ
は入る(結)我君よいまづ御入りわれ升ふト此仕組よて道
具廻り
○本舞臺の都山佐々目谷觀音堂破却の体爰よ以前の滿重
篤光對子四人よて鳴物よ成り觀音堂を打こぼつ(滿)斯く
さんくよ打破よ變化の形も見へざる(篤)床下よ何や
らト石畳みを上るとぞるくよ成り十一の星空へ上る此
時向ふより結城出て來り三人空を見(三人)ハテあやしや
いぶかしやホア(結)ヤ、最早御堂を破却なせしか(滿篤)
持朝とのよ何ゆへあつて此所(結)されハ我君よも
御後悔ましく早破却をとめよとあるよよつて(滿)ス
リヤ君よ御心ひるけへし(篤)斯く手違ひよなつたるか

(結)足利家を横領あさんと一色ケ結構(篤)義興以下の怨
靈が今宵世よ出し(滿)善か悪かのまらねざる(結)心懸
りな(三人)事じやなアト此仕組山あろしよて幕
○二幕目本舞臺都而鶴ヶ岡一の鳥居の体爰よ百性三人風
間の手下鹿六松五郎居てまゝくせりよあつてを入る爰
へ左京篤光太郎三人出て來り(篤)シテ身共よ御用と
(左)御用と申ハ外ならず今日兄一式川狩を仕りしをこ元
様よ御同道下さるまゝか(篤)イヤ手前も好な道なれハ御
同道仕りたけれと(太)イヤ伯父若人御出被成がよう
御ざる(篤)然らハ後刻ト篤光鳥居のハへえへる(太)まんま
と首尾よく(左)コレ身共が兄許承のよも意恨のあるや
つ大膳どのハ頼まよよつて川狩と申せしも船中よて彼れ
を討てる手段ト爰ハ鹿六出て(鹿)よ御断して御ざり升
あ(太)誰れかと思ハハ鹿六風間へ送りし手紙の返事ハ(鹿)
それよ付おそなしもあれと(太)爰ハ往來(左)神職方よて
何かの事を(鹿)おこし被成升せト三人鳥居の内へ入る

此時向ふにて(大せ)ラせうト 鉦打の女乗物を陸尺
かつき侍與女中繪合桐壺中問三人よて田舎娘の娘を引立
出て來り(娥)まを御めん被成升せ(繪)それ中間衆顏の
皮をむしてやらんせト乗物の内よて(藤浪)それよてわし
が成敗仕升ラト怒より出るを娘見て(娥)チ、おまへハか
うさん(藤)マ、コレトわらわへ對母などハコレ繪合
桐壺ハのこり供廻りハ先へおじや(とま)ハ、ハ、ト鳥
居の内へまゝくを入る(繪桐)モ、ヤ日ごろおとなしの
(藤)元の専主のあまつちよ(娥)おまへハ小栗さまの乳
母奉公私を他へ養女より今ハおまへハ多くの人よかし
づかれおまへハ私を可愛ハあいかいさ(藤)先に與さま
が死なよ付こみ園のお伽落したハ万千代此おつかアが
世よ出なら引とるから思ふて居るが、(娥)イヤ、私
しやいややわいさア(藤)エ、わからぬあつちよちよだな
ト此時上手て横山太郎(藤)ヤ、あの聲ハ儘よ篤光ト
貳人よ叩く貳人吞込(繪桐)私といつ所よんせト娥の

手とり取り橋懸りへ入る愛へ篤光出て篤われり満重と
の御内室御参詣で御さるか(藤)ヲ、あなたハ篤光様ト
左京太郎出て来り太伯父者人是御さつたか左篤光殿
泰らふでハ御ざらぬか(篤)カカさるやう致そふト三人
向ふへ入る愛へ給合桐葉出て来り(貳人)奥さま藤そふ
して娘ハ(繪)あなたさまのおつしやるとふり幸ひ出逢ふ
た人買(藤)シテ其金ハ(桐)五十兩ト愛へ醫者宗扁出て
来り(宗)奥さまはふお出被成たか(藤)そふハ宗扁そ
ふしてたのもし一葉ハ(宗)すあわら果(藤)他聞と憚る
事ゆへ何かハ神職よて(宗)得と毒の用方をト四人鳥居の
内へ入る上手より照天姫青柳出て来り(照)今のハモ
ヤ助重さまのト此時(鹿六)さらくどうしやアがれ金で
かつたわれがかゝらだ(娥)らんならわたしをかゝさんが
(鹿)どつこいよがしてなるものかト捕へる照天青柳ハ
(青)そな者ろの娘をふぞちらへ(鹿)うつてくれと
かろの齎りろの姫かへて行のたト手を取る小助出て鹿六

となげる(青)あなたハ小助さま(鹿)金でかつた女をつれ
て行のよ何んでおれをおげやアがつた(小助)金で買うけ
しトが何れより買受しぞ(鹿)サアそれハ(小)いつろの事
よせいばいを(鹿)ア、モヤ、命斗りハ(小)助けてくれ
と申か(鹿)うぬがつらハ袋へているぞト鹿六橋懸りへ入
る(娥)有難御さり升る六ツよて別れし母よめり逢
たる甲斐ものふ(青)姫君さまも御不便がり召仕わんど
のお心ざし當家へ奉公仕やる心ハあいか(娥)重ねくの
御慈悲のお詞をふぞ今からか情よ(青)姫君さまよ仕へる
心か(小)今抱へし女を同道をしお屋敷へ(青)さやうあれ
ハ姫君さまト三人向ふへ入る愛へ小太郎出て来り此内
ハ藤浪が落せし願文を小助拾ひ(小太)うれお出被成る
ハ兄小助で御さり升せぬか(小)うちハ弟丁度よい所で
何かの断しハ宅よおいて(小太)お供致し升ふト向ふへ入
るト愛へ藤浪給合桐葉出て来り(繪桐)最早御歸館わら
れ升(藤)ヲ、ろふ仕升ふト此仕組行列の鳴物よて道具

廻る

○本舞臺都而相模川の体愛以前篤光太郎左京船の上
上ふ三人立廻りあつてト篤光を貳人りして切殺し見得
よて道具廻る

○本舞臺都而後の道具の体愛は鹿六松五郎小助を取り巻
(鹿)さつさ女をとられた返報(松)観念しろト立廻りよ成
り愛へ小太郎出て(小太)兄上り(小)弟(小太)兄の助太
刀ト立廻りよ成りト、兩人を追て橋懸りへ入る愛へ太
郎左京祠より大膳神木のうろより詮秀出て来り(詮大)息
へたへたか(太)ようくの事(左)最早是にてト愛へ道
助出て来り小助小太郎出て来り大膳の四人を見て(小太
(愛)ふやらわやし(道)八殺ト花道の四人小石を拾ひ打付
る此仕組浪の音よて幕

○三幕目本舞臺都而筑波山麓旅籠屋の体愛へ重藏善六郎
出て来り善(おあふの)御ざり升る(善)ヲ、よし(善)
助重様ハ此山麓の風向兄弟を召捕り御さつたがものよふ

酒よ酔ッて(重)身共が主人も酒よ酔ッてハたわいお
しトひよろくとして重藏を入る愛へ鹿六出て(鹿)コレ
野交助重のよふす(善)酒よたわいも寐入りハ(鹿)ろ
んなら此事頭ト兩人を入る重藏平八郎平六郎出て来り
(三人)今のよふすハ助重愛へト入る愛へ善六出て呼子
を吹ト下手より手下大せいで出て来り(善)そあの者ハ忍だ
トをか、内へ入る平六平八出て(平八)亭主覺悟ト繩
を掛る愛へ三藏を繩を掛引立出る(善)われもやられたら
(松)どちを組んたわへ(平六)有標ハ風間の様子を白狀致
せ(松)いふから命斗りハ(平八)ヲ、白狀致せ(善)何を隠
ろふ今宵よせる大膳ハ風向の弟九郎とびふものをれが手
引をするところ(松)もふ斯う成つてハ仕かたがねへ(平六)
ろの方共今より心を直し助重公へ隨へハ褒美をくれるぞ
(善)心を入替へ(松)助重さんよ降参(平八)シテ風間の進
む道ハ(善)向ふよ見へる火の光が(松)風間の同勢(平八
平六)スリア火燈ケ支度致せト道具廻る

○本舞臺都而筑波山風間山塞の体爰よ美登小太武者修
行よて住ひ居る傍お小彌太居て(小彌)ドレ此事をお頭へ
ト(風間八郎)イヤおれがうへ行ラト出て来り(八)小彌
太こいつをぶつばあせ(小太)それがしをあんどしる(八)
小栗助重ケ廻し者であらふげあ(小太)コハ迷惑拙者の醫
者よ御ざり升れハ助重とやらハ(八)ヲ、醫者と有ハ是よ
て療治しろ(小太)療治ハ望む所(小彌)おれハ是からかど
わかした女をお頭へト此仕組道具よろしく廻る

○本舞臺都而浪遠見の道具の体爰よ風間九郎居て呼子を
吹是よて松五郎出て(松)相圖の呼子ハ頭かそらから達ハ
おめへよ用ハねへのだ(九)扱ハ敵へ裏返つたあト此時平
八郎平六郎以前の手下をつれ出て(平八)風間九郎助重公
の使者の趣き一ト通ハ聞きやれ今貴殿の相から見る所適
豪傑(平六)今より心を入替へハ助重公が領地與へんと
ある仁慈のお詞(九)われくがあす業を憎と玉へずお抱
へ下されんとお兄弟諸共參上致せバざんじ暇を(平八)三

やうあれハ是ある小船よて(平六)追案内を(九)ドレ致し
升ラトとあく見へよて道具廻る

○本舞臺元の道具成り爰よ小藤由縁居て(由小)お頭さま
く(八)おれを呼ハ誰れしや誰れかと思へハ小彌太がう
どわかした來た貳人りの女爰へ來のハおれお抱れて寐るの
か(由小)御心で御さんすわいあアト此時九郎出て(九)允貴
今戻りやした(八)弟かそラして今夜の首尾ハ(九)上首尾だ
が兄貴咄しがあるのだが助重ケ旅宿へ押入ッたが敵の手
立よ落入ッて小栗が家臣よ取り巻れ切死せんと思ふ折助
重どの、情も詞も改心しておまへも小栗殿よ(八)いやだ
くト此時小藤由縁懐劍を抜て(由小)八郎覺悟(八)コリ
ヤ八郎を何とするコリヤ何者だ(小)ヲ、かどわかされし
女と偽りし助重が家臣よて片岡賀三郎(由)加次郎(八)
女と見せしうぬぐ貳人りハトイエト聲する(八)飛道具と
ハひさやうあやつト此時小彌太小太郎出て来り八郎見て
(八)扱ハらぬらト是よて平六郎平八郎出て来り(平八)

平六)我く斯あるからハ身動きハあるまいが(九)サ
ア兄貴よふだ(八)何万人取圍ども今そ八郎ふしぎを見せ
てくれんト印を結ぶどろく、おて八郎消る(ミあく)今
までありし八郎が(平八)おのく用意召れトとあく見
得よて道具廻る

○本舞臺都而筑波山半覆の体爰ハ八郎九郎立廻りあつて
八郎印を結ぶ是よて九郎胸りして(九)扱ハ行ハ術あつて
んねん成りト無度ある此時助重家臣とあく出て来り
(助)長追あす(九)ハアおのく方ハ助重公へよさよ
ふよ(助)家臣が注進よを聞た改心ハ通れろれに付ても
小彌太か働今より池の庄司と名乗べし(小彌)ハア、(助)
片岡兄弟九郎が働追く家臣がト仕打よてとあく引張
りよて幕

○四幕目本舞臺都而小栗助重館の体爰よ腰元四人万千代
五人よて面を千鳥を仕て居る爰へ田鍋平太出て来り
(平太)若殿には奥へト五人奥へ入り下手ハ平六郎平八郎

出て来り(平八平六)親ハ御用に御ざり升るか(平)ヲ、悴
う此程より怪しき事のと多く其方共は助重殿のお傍よて
(平八平六)畏り升たト兩人は下手へ入る此時揚幕よて
御上使のお入りと呼込む向ふより結城六郎出て来り奥よ
り滿重出る(滿)是はく結城どのよは御役目御苦勞イザ
まづ是ハシテ御上使の趣は(結)上意の趣余の義にあらず
助重判官代としく領地常陸の風間兄弟を數多の盜賊多く
召抱へ事野心の聞へあるよ付今日より滿重は出仕を留め
置ものあり(滿)スリヤ悴が常陸よて多くの臣を拘へる野
心この御疑念とて(結)いうよも是といふものも先年觀音堂
の破却の報ハ篤井どのにハ水死にて家ハ斷絶(滿)又當家
も迷惑(平太)是といふのもア、一色(結)うれがしの左で
そよ存するまかし滿重殿ハ謝罪の功を立るまで暫時御
休足(滿)結城どのよは奥殿よて平太御案内まづくト仕
打よて平太案内して結城奥へ入る爰へ繪合桐葉菓子
折と持出て(繪桐)若殿助重さまより此桐葉子を(滿)さや

七

うかト此時與より藤浪出て(藤)アイヤ我君其御菓子を手
 を付る事御無用(滿)とめしはいかなる事ぞ(藤)外の事
 でも御ざり升せぬ助重様は此程よりの御不行跡もしやあ
 なたこの御身は凶事でも今日御上使の御入もあまたをバ
 御隠居させ助重さまのみなせる事(滿)さやうな伴が心
 てあつたるウアノ見も穢わらしき此菓子ト蹴落す此時下
 手も神出て菓子を喰ひ其儘に死す(繪桐)神の此体はモシ
 ヤ毒でも(滿)扱ころ伴がト急度なつて立掛る爰へ平太出
 て(平太)殿はさつおどまりおされ(滿)憎くも伴平太
 首打参れ(平太)それじやと申て(滿)エ、打と申(平太)
 是非よ及ばぬ(藤)是で此身の(滿)ヤ(藤)イ、ヤまづかこ
 一被成升らト平太滿重こなしよて入る(繪桐)奥さま首
 尾よく(藤)ア、コレトまなく仕打て道具廻る
 ○本舞臺都而判官代助重居間の体重お助重平八郎平六郎
 付添付て(平八平六)ト御體散被成升らト爰へ平太出て
 來り平太若殿ト密ト申上度義が御ざり升る(助)何予

よ密用と(平太)悴遠慮致せ(平八平六)ハ、ハア、トえ
 入る(助)シテ密用と(平太)今宵せまる御身の大事(助)
 何とす(平太)此度君よハ多くの盜賊を抱へわりしハ鐵
 倉窓のへ弓引野人の氣ざしと御疑ひろきのまならず先刻
 君より大殿へ提ケし菓子ハ毒藥と見へ手飼の神が喰すと
 其儘死たりるれゆへ彼が罪を糺せと某へ仰せつけ(助)先
 刻送りし彼の菓子もヤ、ト驚く此様子を兵助大八郎
 加太郎加二郎開居て内へ四人を入る(四人)ろふじやト切
 腹を仕よふとする(平太)ヤレ待れよ何ゆへの生害なるぞ
 (兵)君よ苦心なき身の潔白(助)死するも及ばぬ其申譯ハ
 予が切腹(平太)早まり玉ふな若殿御切腹ハ成り升まぬ一
 トまづ此地を落のび(助)時節を待であらふト平八郎平六
 郎出て(平八平六)何卒拙者も供(助)心任せよ致せ一
 ト先此地を平太もふ此世でハまなくエ、(平)イヤ御出
 退、まなく花道へ行仕打爰へ滿重出て(滿)コリヤ待
 (助)あなたハ父上(滿)ヨウ其方ハ伴と守護なし無事でお

(助)左程(ま)まなく(ま)やう御ざらハ大殿様トミ
 なく愁の仕打にて向ふへ入る爰へ結城出て(結)助重
 どのを討しか君臣主への申わけハ腹切たであらふがな
 (助重平太)仰せの通り此上ハ小栗の家を(結)氣遣ひ召る
 なた爰へ結城の家來出て(家)我君最早御歸館(結)ヲ、て
 うらんやとト結城仕打あつて入る藤浪出て(藤)斯うし
 て仕舞へハ家の跡目ハ萬千代(滿)うちハ藤浪(滿)つとろ
 ふ女房お欺かれ腹と切つたハ、(ま)ま(滿平太)ヤ、何
 と(藤)日ごろ邪摩に成る助重ハ野心どい、ふらし此家を
 梵天國おめへハ腹をさらしハ我子萬千代ハ家督をさせ
 さいわしが望(滿)わか工おてありしか(平)御主の仇
 復期ト掛るを三人立廻りあつてト、兩人の首を落す爰へ
 繪合桐盡出て(繪桐)奥さま討手が参り升た(藤)コリヤ斯
 うしてハ居らぬト三人よろしく仕打て道具廻る
 ○本舞臺都て裏手水門口の体爰へ小太郎五郎捕手とな
 く立廻りあつてト、小太郎まなくと追て入る爰へ



(藤浜)水門日より万千代を脊負ひ出て来り上下より繪合
桐蓋出て是と見て(藤)貳人りの者か(小太)正しく主君の
繼母トよかて一寸立廻りト藤浜花道へのがき行(小太)
取り逃したるいまくしひト此仕組見得よて幕

○五幕目本舞臺都て權現堂村の休爰に釘打の女乗物を置
横山四郎同五郎腰元青柳助重の四人旅形りよて笠を冠り
説て居る乗物の内より照手姫助重と見て青柳(青)
御貳人さま此場は此儘又あなた方へ姫君の仰せなきバ今
宵御一宿を(助)何かしらねと御厄介も成申うらトミ
なく仕打にて道具廻る

○本舞臺都て横山安秀隠家の休爰に横山太郎姫をくとい
て居る(太)コレ姫よ返事をしてよいでないかト爰
へ青柳出て(青)コリヤ姫を何と被成舛る(太)姫と夫婦よ
成り伯父の家を起すのだ(青)スリヤ道が違ひ舛る此照手
さまよハ助重さまといふぬしわる姫若女ヨリ此座敷長
居御無用(太)今参るハト太郎入る青柳こなしわつて

下手へ行(青)とふぞこちうへト助重出て(助)是ハ世話で
あつた(青)とふ致舛てゆつくり御咄しをト青柳下手へ入
る(姫)助重さまおなつかしう御ざり舛た(助)思ひかけ
ない此家ハ(姫)家のたいてんより伯父大膳が世話よて此
家ハ(助)スリヤ大膳ハ此家ト行ハ掛ると姫留て(姫)マ
ア待て下ざりませ(助)イヤ身ハ父の破たる一色を討ねハ
(姫)それならば本意をとげさせ舛ら(助)何と申(姫)一色
ハおろく此家へ参り舛れば(助)そを幸ひト爰へ太郎
三郎出て(三人)不義者見付た取り巻大膳出て三人を當る
(助)姫(こま)太(婢)のへ申わけ今宵助重とどの姫が婚
姻引手に是なる一ト品ト轡を出す(太)此方ハ笠の引手に
貴殿の馬術を所望もふす(助)いかなる馬かハしらぬと轡
引手とあつた所望も任せん(大)照手あんない(助)後刻其
座でト助重姫入る爰へ四郎五郎出て(兩人)親人さま
(大)それト兩人吞込ト三人ハ活を入れる三人ハ(三)
人(親人)いといめよあわしたるア(大)それハ助重を仕舞ふ

て取る身共が思案毒酒をもつて(五人)アノ助重を(太)
ア、コント押へる仕組よて道具廻る

○本舞臺都而馬屋の休爰に四郎五郎の兩人ホて道助を責
て居る(四)サア道助篤光を殺したやつをえやくしハ(道)わ
たくしはぞんじ升せぬ(五)しらぬとてろの儘に置ふかト
兩人よて道助をさんくよなぶりざり爰へ小栗の五人出
て来り四郎五郎小隠れをする(助)その荒馬を引山せ(ミ
あ)スリヤ我君よ(助)一ト馬場乗て横山親子の生
ぎもひといでくきん(道)その馬出す事御無用(ミあ)ト
深手を負ひしろの方ハ何者なるぞ(道)ハハ私ハ名武の下
部道助大膳が非道の刃ミ(スリヤ)横山(助)シヤト
めしハ(道)主人篤光さまの敵ハ横山(助)スリヤ篤光と
のを害せしハアノ大膳(道)とふぞお情に此苦痛ト(助)い
ふにや及ぶト仕組ミなく愁ひよて道具廻る

○本舞臺都而大膳館庭先の休爰へ助重鬼鹿毛よ乗出て来
り腰元六人櫻の枝を持出て立廻りわつて助重甚盤乗ホ

つて大膳小柄を手裏劔を打助重受留(助)スリヤ何と召る
(大)あまハ見事な馬術ゆへ通れ手の内此上ハ祝言の盃
(助)有難ふ御ざり升る(大)それお酌ト爰へ青柳出て(青)し
ばらく(敵)を(助)何を何で留るぞ(青)サア姫君の仰せ
祝言の座で祝して姫ハ一トさし(大)姫方望とあつたや

致せ(青)姫よの(姫)ハア出て来ハ此時今様お成り(姫)
高野の奥の玉川の氷ト舞納る助重心付盃と傍へあける香
みし仕打よて苦き思ひ入り(助)此酒を吞一トしく(大)助
重苦しむ(助)何んと(大)今呑みしおのれを殺す毒酒
だ(助)ア、ト爰へ太郎出て来り(太)親人の仰せの
通り小栗家来ハ首尾よく毒酒よて(助)スリヤ郎黨まで
(大)是よて我大望もたいえん成就(助)おろかや大膳苦痛
と見せしハ偽りだ毒ある事は姫が舞よてよく知つたり
(大)スリヤ姫が舞よて知らせしかト爰へ(助)六人入
(六人)君よははあわりしか(大)ヤ、ハ、無事に郎黨も
(六人)ヤ、姫が舞よ我くもよく知つたり(大)もふ此上

は破れかぶきそと上下より捕手大勢出て来り助重をとりまき是方立廻りに成りト、助重のまなく捕手を追ふて向ふへ入る跡、大膳のまなく仕打あつて(大)今ハ助重を(伴五人)親人様(太一)酌をまかせ(五人)ハアト此仕組酒盛りよて幕

○五幕目返し本舞臺都て相州六浦濱邊の体、愛へ平六平八出て来り(平八)弟なすや(平六)兄上ウシテ我君ハ(平八)見失ひし上か、是は是よ切腹ト、愛へ加太郎加次郎出て来り(加太加次)コリヤ何ゆへ生書(平八平六)何ゆへど、おろか我君を見失ひしゆへ(加太加次)我君はつ、けなきぞ(平八平二)スリヤ我君つ、がなきとあアト、愛へ待出て登期と切つて懸ると四人よて追ふて入る、愛へ照手青柳出て来り侍と立廻りあがら出て侍よげ入る(姫)青柳よ、手を負しかト、愛へ(娥)娥君さまか(青)娥とのわだし、成り替り姫君を此深手でハ(娥)青柳殿(姫)おかなくなりしかト、愛へ小助出て姫をど、ようとする下手

より常陸出て姫の袖を引と、姫逃よふとするそづみよ袖しきらざる船の内に藤浪居て、姫を乗せる此仕組引張にて幕

○六幕目本舞臺都而漁師小助内の体、愛よ仕出し庄屋お寮おの居て(庄)おふれといふハ判官代助重とそやく捕押へ出せ、褒美よ成る事是うら、へ(仕出し)わしらも一所おとみあ、入る愛へ、姫君娥出て(娥)姫君様(姫)今のおふれハ我夫の(娥)ア、モシト、愛へ万千代出て来り(万)兄上の御内君(娥)助重様を兄上とハ(万)わしハ小栗滿重が乙子よて万千代と申もの(姫)助重さまの弟でありしか(娥)姫君さまお出被成升せ(姫)行とは(娥)サア家いわたし、實の母、心よからぬものゆへト、藤浪出て(藤)ろんな夕くらがりて連れて戻、たるなたハ(娥)おまへハか、さん(藤)娘めいたかつた、照手姫も、よい事をしたわいなア、御家のぼつらくより此子をつれ、此所よ助重さまよおあわせ申、夫婦よ移し升せ、(娥)そんならおまへハ

心を直し(藤)愛ハ人目もわれ、次の間へト、姫入る、愛へ

小助出て来り(小)女房今戻つた(藤)こちらの人(娥)ヤアおなたハ(小)いつぞや鴨ヶ岡で(藤)おまへハ知る人とかへ(小)イヤしらぬ、ト、愛へ(鹿)六三藏桐葉繪合を引立出て来り(鹿)サア此間、鶴ヶ岡で女を買ぬしをいへト、内へ入る(桐繪)姉御さんだやつ、参り升た(藤)何とんだやつと、(鹿)ア、愛よ居やアがつたなア、サア五十兩かつた女も、愛よ居から、このつ、なれぬいだなア、サア五十兩をかへせ(藤)ろんな事ぬかしても、けぬ、から面らでも、あつてさやア、がれ(三)こいつア、つよく掛合(鹿)掛合なくつて、おふするものか、是から表向よするのだろ、と思へト、出るを小助仕なし、あつて(小)イヤろの金ハおれが返へ、そふ(鹿)三)そんなら、われがろの金(小)ヲ、くれお、さまで、よ、つと、(鹿)三)それまで、待つて、遣ら、ト、三藏、鹿六、入る、娥仕打あつて(娥)又もや、愛で、おなたのお世話に、(小)何のその、禮よ、其、替り、こなたよ、聞たい、事がある、(娥)それ、愛で、ト、愛へ

(步)出て来り(步)小助どの詮議の事よて、役所まで、わしと一所よ、(小)ろふか、そんなら、行ふか、ト、小助、歩を、入る、藤浪も、奥へ、入る、愛へ、常陸出て来り(常)女房ハ、内、居る、ト、藤浪出て(藤)女房ハ、居る、が、何所の人だ、(常)おれハ、人買、常陸といふもの、だが、是非、買たい、ものが、あつて、来た、のだ、(藤)ろまハ、幸ひ、わたしも、賣たい、け品、がある、(娥)か、さん、賣たい、品、どの、(藤)ろ、なたの、知つた、事、じや、ない、奥、(行)ク、(娥)ハ、イト、是非、なく、奥、へ、入る、(藤)ろ、ふして、買たい、といふ、女、の、顔を、しつた、か、(常)イヤ、しらぬ、(が、合、綾、をもつて、来、)此、片、袖、が、おれ、の、見、當、だ、ト、片、袖、を、出、す、(藤)ヤ、それ、ハ、(常)か、さん、夕、ア、ハ、味、(事、を、仕、た、な、ア、(藤)こ、なた、で、あ、つ、た、か、(常)女、を、渡、し、な、せ、(藤)こ、つ、ち、が、ご、ま、か、し、た、女、を、た、ハ、ハ、渡、さ、ない、よ、(常)ろ、れ、じ、や、ろ、れ、か、ら、お、れ、わ、此、片、袖、の、女、を、登、入、り、(藤)ろ、ふ、し、て、や、ろ、ふ、よ、(常)得、心、か、(藤)晚、い、愛、ま、て、来、る、が、い、(常)承、知、だ、ト、入、る、(藤)顔、を、ま、ら、ぬ、へ、を、幸、ハ、娘、と、姫、を、か、へ、ト、又、姫、を、生、か、し、て、置、時、ハ、ト、愛、へ、万、千、代、出、て、(万)母、上、

さま(藤)コソろふして姫君さま(万)よふ寝入ッて(藤)
 ろふか我身(奥)へ(万)アイト入る(藤)をぶさつとある
 からの寝鳥をさそも同じ事ト藤浪上手の障子家体を明る
 内よ万千代寐て居るを姫と思ひ出刃よて貫く万千代ハッ
 ト苦しみ轉び出る藤浪(万)とふぞか、さまお心と直
 して下さり升せ(藤)姫と思ひし(万)裏からおおがし申
 升たおたしや兄上の内君お代つて死る身憂期苦しいわい
 なアト息絶へる(藤)エ、いまくしいなアト愛へ(繪桐)
 壺姫と娥を引立出て来り(繪桐)今臺所お居ると此女が裏
 から逃出すゆへつれて来升た(藤)貳人りを繪桐姫を賣て
 助重の有家を(藤)ヲ、愛よ松葉があれ(繪桐)松葉をぶし
 にしておやり被成ト姫をく、り付松葉よてぶす娥とめ
 るを藤浪さ、へるとづみに娥とさる(娥)コリヤ私をト姫
 松葉煙りよひせる(姫)ろれ程自ら憎く殺して(藤)サア
 苦しくバ助重の有家をそやくいや(姫)ぢらぬ(繪桐)エ
 、まふといやつめト又あぶす是よて姫觀音の利益よて身



そのがれ花道へ行此時常陸出て(常)幸ひ夕アの女手をと
 り向ふへ入る(藤)ヤ、今までありし姫の形ち(三)ヤ
 、、ろふだト三人姫を追ふて向ふへ入る愛へ(小)助出
 て来り直ふ内へ入る娥見て(娥)小助さまおそつかつた
 く(小)助おろつたど(娥)サアか、さんが姫君を追
 ふて行升た(小)何姫君をト愛へ三藏鹿六出て来り(三)鹿
 サア約束の時刻だ(小)それ所でない(娥)私の苦痛
 を(小)ヲ、ト首を落す(鹿三)コリヤ首をト悔り小助(向
 ふへ)入る此仕組幕
 ○六幕目返し本舞臺都而金澤瀬戸橋の休川の中よ管舟お
 ると愛よ鹿六三藏居て(鹿)さつき小助から形よとつた此
 金佛よふか買人よ買てへ(も)のだ(三)そふよコッ鹿六向ふ
 から誰れやら(鹿)小影よ忍ト兩人下手へ忍を入る愛へ常
 陸照手出て来り(常)私ことハ元ハ名武の家臣美登の小太
 郎と申者漁夫小助と申仲るハ私の兄よて後藤小助よ御ざ
 り升る(照)そんならそなた衆貳人りの家来でありしか(常)

國表とへだ、れバ御顔も存せずト愛へ(以前の鹿六三藏出
 て(三)鹿)扱こそ照手姫おれと一所ト手を取を小太郎さ
 へる是より立廻りト、小太郎貳人りを向ふへ追てと入
 る(照)小太郎長追すなト愛へ管舟より人買小鷹出て(鹿)
 モシ御姫さんわしといつ所よト姫を取押へ猿ぐつわをし
 て舟の内へ入る愛へ小太郎鹿六三藏を連れて出て来り三
 人よて立廻りあつてト、貳人りを切倒す仕打あたりを見
 て(小)姫君何れへ行しかト向ふよりおふじとしり出て
 来り常陸を見て(藤)サ、おまへハさつきの人買か照手姫
 をまづ居たらふ愛へ出せ(常)イヤおれろとらぬト争
 ふ愛へ小助出て来りお藤を見て(小)コリヤア女房お藤じ
 姫を追うらハモツ了簡ならぬへといきなりおふじを切り
 倒しとめをさ直よ自分の腹へ突立る常陸悔りして
 (常)兄上よ何ゆへ(小)弟われの姫を見うしない其上なら
 ず觀音の尊像よて(常)イヤろの尊像ハさいせん悪者が落
 せし是成か金佛(小)それよて一ッの安心弟跡を頼むぞよ

(常)をやまつた事してくれたあトなげく仕打爰へ常阿上人出て来り(常)あわれ御僧手負へ讀經を授け給へ(上阿)いもよ佛果を得させん南無阿彌陀佛(小)嬉しや成佛ト貳人愁のこなし上人念佛をとなへるト此仕組愁よて幕

○七幕日本舞臺都て金生山化見の休爰よ通雅よ徘徊師櫻花を詠めて爰へ萬長の女房小笹同娘花子供をつれ出て来り(通)これハ花子殿初櫻見物でござるな(笹)おなたかど存升れハ通雅さま(笹)まつは是へ(供)モシは寮人さま此願とハ覽被成よふ書升となア(花)ほんよ誰をか書しか今世よこふゆふ殿はけあるあま(笹)此書師の宗丹主ハ一村落よ住よし(通)美男の評判高き今の業平(花)らんから此書に似しお方がト此時悪者出て(悪)コリヤ女おきの酒相手をしろトみなく見て恠りする爰へ助重鬼鹿毛を引て是を見て恠り舞臺へ来り悪者を投のける(悪)コリヤおれをニ、やつ付るト助重と立廻つて悪者よけは入る(笹)何のお方かハぞんじませぬが有難はざり升る(助)何のよ

其禮よ(笹)おふど名前を(助)拙者ハ宗丹と書師よござる(花)らんからあなたが(笹)只今のお禮も申たけれハおふど私宅まで(助)夫ハ又後して(花)おふどお慈悲よ(助)左様はざらハ同道ト此道具廻る

○本舞臺都て青墓萬長座敷の休爰よ以前の助重小笹花子萬長居て(萬)今日ハはからづも(娘)が危急をお救以下さき有難はざり升る(助)それでも返つて身のめいわく(笹)別ハほもてあしもござりませぬハ今宵はゆるりト(花)おとまり被成て(助)さほどまでの仰せゆへ(萬)そきハ有難ふりり升る(笹)何ハともあき風呂へ(助)んかい世話よ成り申ト道具廻る

○本舞臺都て萬長内風呂場の休爰よ小笹居て(萩)さいせらんうまやよて見まハ我夫アが常よめしハアノ鬼鹿毛がどふして爰よ聞ハ鬼鹿毛よ乗つてお出のお方が風呂へ召すとの事はよて様子をと爰へ助重下女付出て来り小笹出て(萩)あきたハ(助)そちハ恠り(萩)おふして爰へ(助)見

まバ水仕女ハ手足のぢんじやう是ハハ様子(萩)夫ハの爲よ難義も逢ふてト一言(助)イヤ其夫ト逢ふ迄ハあけしてろまと言サハ只く忍び一字を(萩)忍かねし此身(助)トレト風呂ト道具廻る

○本舞臺都て同座敷の休爰よ小笹小萩居て(笹)さいせん風呂場での様子なれと娘の戀人トすい仕升たとうぞ娘よ取持を(萩)こまはづりりゆるして下され(笹)おふでもあろふがくわしハけハ奥でゆつくりト小萩をつれては入るト爰ハ助重出て(助)風呂場おいて出逢しハ女房照手いかなハけハト仕打爰へ花子出て助重の傍へよる

(助)照手か(花)ハイト爰ハ小萩出て(萩)はからず我夫の出逢ハ忍べといふまどトト仕打よて(萩)モシ我夫(助)エ、ト恠りして花子を見て(助)こなたハ此家の娘ト突放す爰へ小笹出て(笹)モシ宗丹さま娘が願ひを(花)おふぞは川に被成て下さり升せト小笹小萩見て(笹)コレ小萩さいせん(萩)サアそれハ(花)うちもたのんでた

いのふ(助)添き事ながら拙者ハ妻がござれば(萩)私よハハからねど此身よも難義の(笹)それなればやふ取持しやト爰へ花見の時の悪者出て(悪)さつき腹いせよ客とこまかし泊り込さつきの返報ト四人よて打て懸る此間よ三人にて小萩無理引立向ふへは入る助重恠り(助)あれなる小萩ト一人の(悪者)何をト又拙者助重扱打よ切ト木のかしらよて幕

○八幕日本舞臺都て箱根山の休爰よ天狗五郎雲助八居て(五郎)照手ハおふした(雲)よふく取押ハた所へ小太郎といふやつよ追立られ娘ハ地獄谷へ(五郎)らいつアぞんねん手譯をしてよがせ(雲助)台点だトは入る爰ハ飛脚出て来り五郎見て(五郎)大膽どの、ハ使ひてござらぬ(飛)一色どの、ハ家来五郎どのかよハ所でお目お懸つた(五郎)シテハ用ハ(飛)どうか此狀を一色爰へ(五郎)承知いたしたト此時はたト成り以前の雲助出て来り(雲)旦那大變だ(五郎)どふ致か(雲)権現坂まで来ると一色

まの乗物目がけ親の敵と助重めが(五郎)スリヤの主人飛
 太来やまをトみさく橋懸りへ入る磯崎六郎捕手をつれ
 出る向ふより風間八郎六部の拵へ出て出るを(磯)備よ風
 間ろれト捕手打て掛る立廻りよろしくあつて風間印と結
 んで後へ消る(磯)取り逃したか風間(八)へ、(磯)
 さんねんなアト見待よて道具廻る

○本舞臺都て風間八郎隠家の体道具納る常磐津淨瑠璃よ
 成る爰へ助重野衾を追ふて出て来り(助)ハテ心得ぬ今ま
 有し野衾なんよせよ此家へ案内申ト小櫻出て(小櫻)
 案内被成れしあなた(助)一ち夜の宿りを(小櫻)は不自
 由さへおどいなく(助)何んのいもいさふ(小櫻)申さ
 なたお泊めや其替(助)何用なる(小櫻)今宵はあなた
 の情よ(助)身ハ照手と申妻われ(小櫻)成り升せぬかト
 此時小櫻連判を落す助重見て(助)叔こそ連判を持参さす
 からん慶期ト助重切つて懸るを立廻り又成り是より小櫻
 印を結ぶ助重もんせつして谷へ落る此道具大仕掛よて居

所よて岩山と替る爰に小柳若込みを抜くと八郎に成り
 (八)奇術を以てお引よせ女と見せて助重と地獄谷へ落し
 たれば五体みぢんア、嬉しや悦ばしやト山幕を冠せる道
 具出来次第山幕切つて落止

○本舞臺都て箱根山捕獵谷の体爰に助重飢鬼病よて氣絶
 して居る傍よ照天居る常阿上人居て(上人)昨夜観音の靈
 夢よよつて来て見れば助重が此ありさま一度助て得させ
 んト口よ經を唱へ珠敷にて助重と打是よて助重息を返し
 姫見て嬉しき仕打にて(姫)我夫さま心が何升たか(助)
 照手が(姫)ハイ(上人)此上ハ助重を車よ乗せ熊野山へ引
 連れ湯治せよ(姫)何うら何まで(上人)のお情(上人)はや
 引れよト是よて照手助重を車よ乗せ引出せ上人仕打よて

幕
 ○大詰本舞臺都て熊野那智山の体爰よ腰元四人侍二人居
 て膳部を拵らへて居る爰へ横山四郎五郎出て来り(四五)
 家來共今歸たる(侍)ハッ(四五)シテお客人よはいまだ戻

らぬか(侍)最早お歸りではざり升ラト是よて太郎一色結
 城左京出て来り(四五)只今お歸りではざり升るか(一色)イ
 ヤいかい世話よ相なつた(結)一色公よはからざる所よて
 目よ懸り升た最早お暇(太)行しやるなら名武の系圖を備
 て行しやれ(結)サアそれ(太)ぶつばさそふ(結)サアト
 此時鉄炮の音する(みさく)打し一發は何ものなるぞト
 是よて風間八郎出て(八)誰れでもねへ風間八郎だ(みな
 く)八郎どの(八)此連判を見上味方よつけ(結)サア
 それ(八)イヤと(八)此鉄炮をト此時向ふよて(兵助)
 暫くは待下され(結)途中よおひして召抱(たる下部)風平
 (兵)主人の命がほしく爰でおれを討(結)イヤ血判致ろ
 ふ(みさく)何と(結)下郎如きの命を我よか(八)んや
 (兵)そんならお旦那(結)風間幕下よ(兵)イヤをや腰
 抜お旦那ならおれケ手の裏返す八郎どの、手下(八)ち
 つとろふもわかふか(一色)然らば風間八郎どのトみな
 結城を引立を入る爰へ池の庄司山伏よて出て来り大

膳の連判状落てあるを拾ひ取り(庄)コリヤコレ大膳が懸
 事よ一味の連判状連とそ此家ハ大膳がト爰へ左京出て連
 判を取掛る(庄)コリヤ何とする(左)イヤ何とせぬが
 ハリや何者だ(庄)横山どのへ仲間入りしが致たい(左)
 一トタリやうありそふな山伏(左)吹撃致てくりや
 う(庄)イヤト螺貝を吹兄弟片岡小太郎平六八郎何
 れも山伏よて出て来り(庄)望みの通り(五人)今より吹撃
 よあつかりた(左)扱こそ由断の(六人)此案内下され
 トみなくは入る爰へ照天助重を乗せ車と引出て来り
 (照)そや我夫を御本復させたいのじやアト爰へ風間
 九郎が出て(九)御案が被成升るお拙者めが力とあつて御
 本復を(照)うなた(九)我君風間九郎ではざり升る(助)
 ヲ、九郎堅固で居つたな所詮本復成難し(九)そのよふを
 弱お心でハ御本望ハ遂げ升せぬぞ(助)たどへ命ハ終ると
 も悔と晴さで置くべきかト爰へ大膳四郎五郎出て(大)助
 重照天をぶつばさせト九郎さ、へよとせする瘡の病ひよ

て五体瘠れる(九)折る折どて瘠の惱(照)そんならうな
 たハ(大)敵の根をたづて(太)シテ助重めハ(太)刃物で
 殺さバ刀の穢れその漣(三人)心付升と三人来て助
 重を漣(三人)心付升と九郎と唐櫃へ入る(大)斯して置
 櫃へ(三人)然らハ親人(大)大望成就の門山の孟與よて汲ん
 (三人)まづくト大膳に入る(太)是からが姫抱れて寝る
 かト爰へ加太郎出でへだて(加)姫我君の御先途を(照)合
 点じやト姫の向ふへは入る爰へ軍兵出で加太郎と立
 廻りあつとど加太郎みなくを退ふて向へは入る爰へ八
 郎大膳左京出で(八)門出の衣服を左京殿の(左)心付たト
 唐櫃へ手をかける中より九郎出で左京殿(大)何やつなれ
 ハ左京を(八)おろかや大膳其方が悪事不荷撥と汝を欺き
 今ハ小栗十勇士の一人風間八郎正國としらざる(九)サア
 大膳覺期と三人にて廻立り成り見得て此道具廻る
 ○本舞臺都て那智の大漣の休爰に照手姫五郎四郎居て照

手姫漣(投込ふとして漣へ行此時助重病平急よ
 て漣より出で来り(四郎五郎)ヤ、ハリや助重(照)御無事
 でありしか(助)健生をしたる小栗助重(四郎)うれ弟
 (五郎)合点だ、切て懸るを助重刀を取て兩人を切倒す爰
 へ九郎八郎出来り(九郎)我君よハ蘇生を給か兄八郎よ
 る先非を後悔あし君へ隨身(八郎)奉公初よ助重公の警敵
 一色が首をト見せる(助)此上ハ大膳をト急度みあく見
 へて道具廻る
 ○本舞臺元の大膳住居よ成る爰大膳結城居て(結)天下の
 逆賊覺期あせ(大)何をト身構へする爰へ八郎九郎兵助大
 八郎平六平八加太郎加次郎出で来り(十人)斯十勇士打ろ
 るひ取圍んだる上からハ横山大膳覺期あせ(大)うぬらよ
 つさら死人の山だあト此時影よてエト登する(大)何や
 つなれハ飛道具を持つてト助重出るを(大)ヤア助重の此
 体ハ(助)熊野権現の神力よて蘇生あしたハ(照)父の警
 (結)心を改ため降参するか(みあ)く(但し首取ふる(大)
 エ、降参あせハト大膳腹へ刀を突立る(助)大膳亡し上か
 らハ(結)小栗名武の家再興(助)ヲ、目出た(とあ)く
 (目出た)くト此任組茶
 日本橋區綱敷町貳丁目拾二番地
 編輯兼 保坂由兵衛
 出板人
 明治十七年四月八日御届

